

---

# Sweet happy valentine

高岡たかを

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Sweet happy valentine

### 【ΖΖード】

N7987Q

### 【作者名】

高岡たかを

### 【あらすじ】

一月十四日。土曜日。

目を覚ますと、妹が友達を呼んでチョコレートを作っていた。甘いにおいに乗せて女子中学生たちの会話が時折聞こえてくる。まあ、ボクには関係ないんですけどね。

一月十三日の金曜日。ボクは夜更かしをした。

目が覚めると時刻は午前十時。布団に入ったのが午前二時過ぎだつたから、睡眠時間は六時間半ほどか。ふむ。まあまあだな。  
しかし何だろ。どうして毎近くまで寝ると頭がボーッとするのだろう。コレはアレかな。普段週五日は規則正しい生活をしていると、たまに生活のリズムが崩れると頭に負担がかかるのかね。  
もう、いかん。

頭が回らん。日本語もどこかおかしい。

カフェインが必要だ。

早急にコーヒーを飲む必要がある。

ボクはしじょぼしじょぼした田のまま、階下の台所を指した。  
ウチもそうだが、子供部屋が一階にある「家庭が多いのはなぜだ  
らう。どうでもいいけど。

視界が磨りガラス越しの風景のように見えるのは、メガネをかけ  
ていないからだ。

それでも何とかなるのが住み慣れた我が家ステキ。  
なんか下が騒がしいなあ。それに甘い匂い。チョコレートかな。  
そう思つてみると、

「あ

「あ

一階に下りたところでの、髪の長い女子と会った。

あー。どちら様でしょ。

母さん、ではないな。女の子だ。

妹はいるけど、ほんに髪長くないし。  
むむむ。頭がボーッとしてるな。

びっくりして固まっているらしい女の子の顔を詳しく確認しようと、ボクは目を細めて近づいた。

「ひ

女の子はさらに緊張して小さな悲鳴をあげた。  
耳まで真っ赤にしているのが分かる少し地味めな顔。日本人形み  
たいだ。

えーと誰だつて。妹の友達でこんなカソジの子。  
何度かウチに遊びにきた事あるよな。  
名前。名前は確か、

「ああ、Hリちゃんか。誰かと思つた。いらっしゃい」

急にあらわれた友達の兄貴に名前を呼ばれば、そりゃ緊張もするよな。

蚊が鳴くような小さな声で、Hリちゃんは「は、はいお邪魔して  
ます」と返事をした。

馴れ馴れしいかな。でも、苗字を知らないんだよな。

「あれ？ Hリちゃんだつて？ リHちゃんだつて？ どっちだつ  
け？」

「あの…… Hリであつてまーす……」

それにしても声の小さい子だなあ。

「何これ。何やつてんの？」

キッチンに入ると、チョコレートの甘い匂いがより濃厚になった。妹と妹の友達（こちらは名前が思い出せない。でも何度か見た事あるボーイッシュなカンジの女の子）が、ダイニングテーブルいっぱいにボールやまな板、その他モロモロを広げていた。

「おはよつね兄ちゃん。今日は何の日でしょ?」

「今日？ 十二日の金曜日次の日だから十四日の土曜日？」

「何言つてんの？」

見えなくても分かつたぞ。冷たい視線をお兄ちゃんに向けただろ。くそ。こないだケータイ失くしたってケータイから電話かけてきたちょっとと知能指数低めな妹のクセに。

「アハハハ。お兄さん。今日はヴァレンタインつすよー」

「バレンタイン？」

「ヴァレンタインつすよー。『ヴァ』つす『ヴァ』。りぴーとあふたみー」

妹の友達が笑いながら教えてくれた。りぴーとあふたみーはしなかつたが。

「どうか。バレンタインか。

一月ももう真ん中か。先週正月だったような気がするのに、時が経つのは早いなあ。

それにしても、この子は本当に元気な声で好印象だな。

「アハハ。ところでお兄さんはチョコも買ってるんですかー」

前言撤回。マイシのトンショノヤツづれえ。あ。思い出した。この子の名前はミヤヒヤんだ。

無言のボクは冷蔵庫を開けて、貰こダメしてあった缶コーヒーを取り出し、一口で半分ほど飲んだ。

糖分とカロリーアイントが同時に補給される。よーしょしょじ。冴えてきたぞ。

「やつか。それで友達集めてチョコ作りか」

「うそ。昨日言つたよ。ミコちゃんといちやん来るつて」

「やつかりちゃんとじやなべてやさしきやんだったか。

「やつじや聞いた気がする。父さんと母さんは？」

「オバサンと二。夕方には帰るつて」

「家族の会話をすねー」

「え。じや頃めじやつあんの」

「十円もひつた。ねえ、コーヒー飲んだんならせつせと行つてよ。今日は女の子の集まりなんだから」

「へいへい」

缶コーヒーはまだ三分の一ほど残っていたが、ボクは退散する事にした。

「「」ゆづくりどーわ」

戸口に立つたまま固まっているエリちゃんを中に入るよひにうながし、ボクは一階の自室に引き返す。

それにも友達と一緒にチヨコ作りか。

半分は自分たちで食べてしまつんだろうが、もしや好きな男子でもできたか。

妹の事とは言え、結局は他人事。

関係ないと言えば関係ないのだが、そうとも言い切れないところが血縁の情。

なんとなく複雑な心境のお兄ちゃんだ。

ベッドに横になり、昨夜読みかけだった小説を手にとった。

内容は一言で言つなら、いわくつきの館の密室で人が二、三人死ぬ話。

ページをパラパラとめぐり、昨日の続きを探す。

場面は連續で発生した殺人劇に、いい年したオッサンがみつもなく半狂乱になつて「お、お前たちなんか信用できるか！ そろか！ お前たちみんな犯人とグルだな！ なら俺にも考えがある。俺は部屋に戻るぞ。扉にバリケードを作つてやる。警察が来るまで一步も出るものか！」と宣言したところだつた。

あーあ。この人死亡フラグ立っちゃつたよ。一人になつたら余計

に危ないのに。

ボクの予想では、前半に行方不明になつた霊能力者の女の人が犯人じゃないかと思うんだけど。

と、にわかに階下が騒がしくなつた。

妹はよくしゃべる方だし、ミヤビちゃんも明るい性格だと思ひ。ボクの前ではあんなどつたけど、エリちゃんも気の許せる人の前では明るいかもしねり。

まあ、女三人寄ればかしましい、と言いますしな。

別に聞き耳をたてていた気はないのだけど、会話の断片が聞こえてくる。主に妹とミヤビちゃんの声だけ。

「えーエリちゃん」「マジっすか」「うん」「やめときなつて」「でも」「エリが」「いつから」「大事なのは」「前から」「でもでも」「どうかな」「でも」「でもじやなくて」「どうなの」「やつぱり」「応援」「うん」「がんばって」  
……何の話かさっぱり分からん。

ボクは再び小説に没頭した。

やつぱり一人になつたオッサンは殺された。

しばらくして、ボクの部屋のドアが開かれた。

ノックもなく急に開かれたものだから、ビックリした。

一瞬、殺人鬼がボクを殺しに来たのかとも思つたが、

「ねえ、お兄ちゃん。どんなチョコが好き?」

妹だつた。

「え? まあ、甘すぎず苦すぎず、ミルクチョコっぽい奴かな?」

「ミルクね！ 分かつた！」

バーン！ ドタドタドタ…… 「ミルク！」  
一体なんだつたんだ今のは。  
まあ、妹の奇行はいつもの事だ。  
えーと。どこまで読んだんだつたかな。

しかし、それから一時間の間にボクの部屋のドアは何度も豪快な  
開閉を繰り返した。

ドタドタドタ…… バーン！

「お兄ちゃん！ チョコの中身は何がいい？」

「んー歯(いたえ)のある奴？」

バーン！ ドタドタドタ…… 「歯(いたえ)！」  
ドタドタドタ…… ドバーン！

「お兄ちゃん！ アーモンドピーナッツ(じゅわわわわ派)？」

「じこで(じこで)ならアーモンド？」

ズバーン！ ドダドダドダ！ 「アーモンドー」  
ドタドタドダ…… チュドーン！

「お兄ちゃん！？」

「ちよつと待て！ 今の音おかしいだろー！」

「アーモンドは碎いた方が好き? それともそのまま?」

「え? あ、うーん。よく考えてみたら、アーモンドよりも「ローン  
フレークの方が好きなんだよな」

「ドッゴーン! ドタバタドタバタ……」「うむん! 中身変更!  
ロンフレド!」「カンバツ!」「うむん。私がござるよ……」  
本当に何なんだ。

それに階下の騒がしさがヒートアップしている気がするんだけど。  
あ。ドアが取れた。

読みふけっていた小説から皿を離し、時計を見ると正午を過ぎていた。

どうりで小腹が空くわけだ。

「お兄ちゃん! 試食して!」

もはやドアとしての機能を失った板が勢いでぶつ飛んだ。  
妹とミヤビちゃん。そして一人に隠れるようにヒロちゃんが乱入  
してきた。

「うわー。ヒロがお兄さんの部屋つすかー。案外汚ねえっすね」

「うわー。ヒロがお兄さんの部屋つすかー。案外汚ねえっすね  
よ。それに思つても汚ことか口にしたらアウトだから。

「お兄ちゃん食べてみて」

妹がチコロを差し出した。甘い匂いが鼻をくすぐる。  
小腹も空いたし、ちょいついこか。

「まずはアタシからですょー。」

一番手はミヤビちゃんか。

白い紙を折つて作られた小箱から、一口大のチコロをつまみ出す。  
形は、

「……自由奔放だね」

ボクは言葉を選んだぞ。

「よく言われるつす！『ミヤビはフリーダムだね』って」

誰に言われたのかは知らないが、フリーダムって言つた奴は、もう少し直球な表現で言つてやつた方がいい。  
さて、味の方は

「うん。チコロ味だ」

「当たり前っす」

もぐもぐしていると、ガリッと口の中で音がした。  
え？ 何これ。アーモンドともペーナッツとも違つミントな感じ  
は

「ミヤビちゃん

「なんすか」

「中に何入れた?」

「キシリトールガムつす」

入れんな。んなもん。

どうりで爽やかな味わいが口いっぱいに広がるわけだよ。

「前にテレビでガムとチョコを一緒に食べるとガムが溶けるって聞いたもん。どうりですかお兄さん。溶けてますか? トロツトロですか?」

「ああ、溶け出しちゃるね」

友人の兄で試すな。

お次は、

「次は私!」

一番手は妹か。形はミヤビちゃんのチョコより丁寧だが、肝心の味の方はガリ。

いきなり異音から来たか。

「チョコだね」

「うん」

「甘いね」

「うん」

「シャリシャリしてジャラジャラしてる。すげー甘い。もつ予想できたけど一応聞いとく。中に何入れた?」

「角砂糖」

「甘いわー。生まれて初めてじゃないか? 角砂糖かじったのって。

「歯痛い」

「虫歯? ちやんと歯医者さん行つた方がいいよ。あ、コレも作ってみたんだけど。カロリーメイトをチョコでコーティングした奴」

「こりゃね」

「お前はアレか? チョコ一個で一日のカロリーをどうにかできる食品を作ろうとしてるのか?」

「最後は、

「大トリはエリっすねーー!」

Hirokiちゃんが押し出されるよひに、いや実際に妹とHirokiちゃんに押し出されて前に出てきた。

人見知りする子なのか、極度の上がり症なのか、見ていてちょっと痛々しい。

「……お願いします」

「いやいや、少し差し出された。別に審査してゐわけじゃないんだけどな。

形は、他の一人に比べて少し小ぢね。一つ一つが丁寧に作つてある。

先の一人の例もあり、ボクは恐る恐るチョコを口に入れた。  
エリちゃんみたいな子が、スパーキングな事をするとは考えにくくいが、万が一があるしね。

一口。

「あ。おいしい」

思わず声が出た。

「ホントですか！ ホントにおいしいんですね！」

なぜかミヤビちゃんが聞いてきた。

「いや、本当においしいよコロ。もう一個ちょうだい」

エリちゃんの返事も待たず、ボクはもう一個をつまむと口に放り投げた。

サクサクした食感はコーンフレーク。ミルクチョコは甘すぎず、ほんの少しまぶされたココアパウダーが程よい苦味。

「エリちゃんのチョコが一番おいしいな

「やったー！」とエリちゃんの後ろでなぜか他の一人が歓声をあげた。

エリちゃんはうつむいて小さくなっている。垂れた前髪のすき間か

ら、顔が真っ赤になつてゐるのが分かつた。

それから、三人でカラオケに行くと言つて出て行つた。

なんだかよく分からぬが、お祝いらしい。

チョコ四つで昼食の代わりになるはずもないボクは、何かないかとキッチンへ向かつた。

キッチンは、戦争でも起こつたように酷い有様だつた。使つたものくらい片づけてから遊びに行けよなー。

目を覆いたくなる惨状のテーブルの上から、冷蔵庫へと視線をうつすと、マグネットで千円とメモが止めてあつた。

メモには妹の字で「お兄ちゃん後ヨロシク」。

ボクは千円をポケットにしまうと、チョココーティングを免れた力口リーメイト（チーズ味）を発見したので、それをかじりながら片付けを始めた。

ボールと鍋を洗いながら思つ。

三人でワイワイガヤガヤやつてたのか。

いいなあ。楽しそうだなあ。

女の子だから許される事つて、世の中案外たくさんあるよな。

ボクは自分が男友達と一緒にチョコを作つてゐる風景を想像してみた。

それはそれは不気味な光景だつた。

ボクは部屋に戻ると、小説の続きを読んだ。

犯人は靈能力者じゃなかつた。

その夜、妹は父親に、

「はいっ！ ハッピーバレンタイン！」

と、チョコを渡した。

父親は満面の笑みでボクが止めるのを聞かず、チョコを口に放り込むとガリガリと音をたてて噛み、飲みくだした。

「ありがとう。おこしいょ」

親の深い愛情を見た一瞬だった。

父親はいつも夕食後にコーヒーを飲み、砂糖を一さじ入れるのが習慣なのだが、その日は必要なかつたようだ。

さて、日付も変わって一月の十六日の月曜日。  
ボクは下校の途中に書店へ寄った。  
いつものミステリー小説コーナーで、

「あ

「あ

妹の通う中学校の制服。  
髪の長い女の子と出くわした。  
驚いた顔をして固まっているこの子は、

「えーと、Hリちゃんだったけ。リHちゃんだったけ

「ヒリです……」

ヒリちゃんはいつでも意味に言つた。

「推理小説好きなんだ?」

見た日本読むの好きそうだもんなー。

「作家は誰が好き? ボクは綾辻とか好きなんだけど」

「その作家さんまだ……」

「そうなんだ。おススメだよ。じゃあ、赤川とか泡坂とか。渋めて  
内田とか」

ぶんぶんと首を横に振るヒリちゃん。

うーん。会話が続かないなあ。

無理して妹の友達と話をする必要もないのだけど、自分から話しあけといいて、「じゃ、ボクはこれで」と場を離れるのもなあ。

何か話のネタはないかと考えを巡らせるといつ話題を思いついた。

「バレンタインのチョコ渡せた?」

みるみる顔を赤くしていくヒリちゃん。

面白い子だな。この子って。いや、この場合は面赤い子と言つた方が正確なのかな?

ボクはヒリちゃんの反応が楽しくて調子に乗つた。

「あ、じゃあ好きな人いるんだ。彼氏かな？　あ、違うの？　あれだけおいしいチョコだつたんだから、もらつた相手も喜んだと思うよ。でも残念だったね。今年のバレンタインは土曜日で休みだつたし、今日学校で渡したの？」

顔を真っ赤にしたエリちゃんは、涙目で『やばい調子に乗りすぎた』と反省しはじめたボクを見上げ、

「も、もづ」

一度深呼吸を挟んで、

「もう、好きな人にはその日に食べてもらいましたから――――！」

信じられない大声を張り上げると、同じく『やばい』信じられないスピードで走り去つて行つた。

あのーエリさんここ本屋ですよ。つか意外と足速いな。

まあ、いいか。

ボクはからかい過ぎた事を後悔しながら、本を選びはじめた。口の中で甘い味を思い出す。

まったく。

ボクはエリちゃんのおいしいチョコが食べられた幸せ者の事を心底うらやましいと思つた。

S  
w  
e  
e  
t  
h  
a  
p  
p  
y  
v  
a  
l  
e  
n

t  
i  
n  
e  
.

(後書き)

今から2年くらい前に書いた作品です。

そのため、一月十四日が土曜日。

季節柄ちょうどよさげだったので、投稿してみました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7987q/>

Sweet happy valentine

2011年10月8日07時49分発行